

秀吉による本徳寺への寺領寄進状

1580/9/2 秀吉、本徳寺（英賀道場）に寺領寄進ノ寄進状（亀山本徳寺蔵）九月二日、寺領田の御印を賜わる『本徳寺英賀亀山之記』下記の写真は、羽柴藤吉郎に名により英賀道場（本徳寺）宛に差し出されたものであ



る。〔28.5 cm × 39 cm〕『当郡内三百石ヲ以テ コレヲ付ケオキソウロウ ソノ意ヲ得ラレ全可有寺納物也（マツタキ、寺ニ納メラルベキモノナリ）如件（クダンノゴトシ）』この期日を以て播州の各所（円教寺・

鶴林寺等）にこの種の朱印が出された。文章は専門のものが書き、花押のみ秀吉のもの。この類の朱印状は西派では本願寺をはじめ願泉寺などにみ出されている。本派では本徳寺が時期的には最初である。（勿論、当時は西派も東派もなく本願寺一門である）

中世の本願寺教団は交易業・技能者・生産者・雇用人など畿内人口の多くをしめる被支配階層の人民を構成母体として形成されていた。鎌倉期からこのような階層の人々は各地に出現し、社会的に目に付くようになるが、それはあくまでもローカルな現象で、本願寺と言うフレームの登場によってその連繋が可能になり、史上初めての民間による社会勢力が出現した。

この勢力と正面から対決したのが信長・秀吉である。彼らはプロの軍事集団であるが、本願寺の構成員の大半は半農半兵で組織も十分に成熟しておらず、結果的には撤退することになる。しかし、撤退後も民衆の潜在力は依然として維持され、権力者にとっては厄介な存在であった。寺領の寄進、楽市楽座の許可等、本願寺に対して取った政策は、権力体制を新時代に安定させるために、彼らの持つ既得権を制限的にではあるが認めざるを得なかったのである。

石山戦争の終盤戦・英賀一揆

播磨国英賀（現、兵庫県姫路市）の一向宗本徳寺を中心に、石山本願寺一揆の一環として羽柴秀吉と戦った一揆。英賀は中世後期に港町として発展した。はじめ播磨守護赤松氏の代官が支配し、やがて有力長衆（おとなしゆ）三木氏を中心に自治的結合が成立した。十五世紀末に一向宗が伸展し、一五〇五年（永正十二年）播磨教団の中心として一家衆寺院本徳寺が創建され、寺内町が形成された。門徒化した英賀長衆は十六世紀中葉に石山本願寺に出仕していた。石山本願寺一揆の時期には毛利氏と本願寺の中継拠点となり、門徒は一揆を起こし、七十七年（天正五年）より中国経略を始めた秀吉と対峙した。秀吉は八十年四月初めより英賀攻撃を開始し、同二十四日に陥落、寺内籠城衆は船で退去した。一揆は門徒化した三木一族をはじめとする寺内町人と農民、および毛利方武士で構成されていたらしい。秀吉は英賀の町人、農民を新設の城下町姫路に移し、本徳寺も移転させたので寺内町英賀は消滅した。『平凡社・世界大百科辞典（新行 紀一）』

英賀の攻防は、後代の史家からは三木氏側と信長側の記録の相違が問題視され、三木氏側の記録の中で英賀戦争を過大に評価することを指摘されることが多い。しかし、歴史合戦の記録書の殆どは、互いに自己の陣営を過大に評価し、敵陣営を過少評価することはむしろ通例と言ってよい。しかし、多くの客観的資料や総合的に分析された結果から判断すると、一月足らずで英賀は攻略されたと思われる。このことから播州英賀における真宗勢力の脆弱さを観る向きもあるようである。

しかし、個々の歴史的事象は単独で生起するものではない。錯綜する多くの事象は、時代の脈絡を形成する歴史の主軸の派生である。当時の歴史の主軸は、信長・豊臣による武力闘争による全国制覇であり、その中で欠くことの出来ない要素は、既に近畿を中心にネットワーク化された本願寺組織との抗争である。播州英賀は陸の孤島でもなく、特定の権力者によって擁護されていた地でもない。むしろ、海路をとおして近畿の一揆と連動しており、一五七〇年から八〇年にかけての信長勢力との抗争が歴史的主軸のクライマックスであったことは、石山戦争の経緯を総覧しても明かである。このことは英賀攻略以前に、中央と密接な関係をもつ播州の真宗が石山戦争で多に活躍していることから伺える。従って、一五八〇年の英賀の抗争は、石山十年戦争の終局戦であったこと、さらに真宗勢力を支えていた門徒は多くは土地に縛り付けられていない交易者であったことを考えると、英賀の一か月余りの敗北は何等不自然ではない。むしろ、播州の真宗勢力に対して、非常に早い時期にしかも寺領の寄進がなされたことに重大な意味があるように思われる。「寺内町」は近畿で二十数箇所を数え、その大半が一向宗の寺を中心に構成されていた。この西の端が英賀である。中世において、民衆（門徒衆）が自らの自治権を確立し、圧倒的な武力政権と真っ向から対峙した、日本史上特筆すべき出来事であった。